

療育施設の実践

“自分への信頼”を育む 人とのつながりのなかで安心と信頼を…

広島 社会福祉法人尾道さつき会
児童発達支援センターあいあい

西田三賀



児童発達支援センターあいあいでの出会ったあやちゃんは、見通しがもちにくく、急に起こる出来事への不安が大きいです。またことばのもつ「意味合い」が理解できにくいことから、相手の気持ちが読み取りにくい…そんなお子さんでした。そんなあやちゃんが、安心できる環境や仲間の中で不安や葛藤を乗り越えてく姿をお母さんで見つめ、療育で大切にしてきたことを振り返りたいと思います。

児童発達支援センターあいあい 入園まで

あやちゃんは、低出生体重児で生まれ、呼吸の不安定さから、お母さんは一睡もできない日々。人とのかわりを拒否し、抱っこされると余計に泣き叫ぶ毎日でした。その後、保育園に通園しますが、あやちゃんへの理解が得られず、転園。3歳の時、お母さんが信頼している医師の薦めで親子教室あいあいの利用を始める。お母さんは「本当に通う意味があるのか」と悩みました。当時の担当職員からは、お母さんの思いや悩みを受けとめ、子どものねがいや思いを共に考えていく

ことが必要だったと連携を受けました。

あやちゃん、私の主治医

4歳から、当センターあいあいと保育所との単独、併行通園が始まりました。このころも、あやちゃんは突然泣き出すことが多く、お母さんはその理由がわからず悩んでいました。自分のできなさを感じ「やりきりたいじぶん」と「できなかったらどうしよう」と葛藤し揺れ動くあやちゃん。まずはあいあいが安心できる場となり、安心して自分を出せるようになってほしいと思いました。

その後、大好きな遊びを中心に、しっかり身体を動かし、友だちと共通のイメージの世界を楽しむなかで、「ともだちっていいな」を感じてほしいと願い、あやちゃんが年中の頃から憧れていた、年長児活動の忍者修行にとりくみました。

自分の思いを伝えよう…

ある日の親子活動で、忍者修行として公園に出かけました。途中の分かれ道、あやちゃんは「あっち」、他の子どもたちは「こっち」と言い意見が割れました。すると、あやちゃんが突然「こっちでいい」と言っ、公園へと歩き始めま

特集

春、子どものこと わかりたい

学校現場などでは障害のある子どもの実態を把握することが大切にされてきました。しかし、その実態把握が「手指操作のレベルは…」「表出言語のレベルは…」というように子どもを細かくチェックすることばかりだと、子どもの全体像がかえって見えなくなってしまうことはないでしょうか。

また、実践において教材の提示の仕方や、子どもに言葉をかけるタイミングなどは大切な視点です。ですがそうした手法のみに焦点を当ててしまうと、子どものわずかな表情の変化やちょっとした発言は見過ごされてしまうかもしれません。

新年度が始まり、子どもたちとの新たな出会いもあります。そんな時期だからこそ、子どもの障害を知り、発達をとらえ、そして一人ひとりの生活をふまえながら子どもをまるごと受けとめて、わかろうとするために大切なことを考えたいと思います。

あの子は今どんなことを感じているのか、あの子のねがいは何なのか…子どものことをわかるために大事にしたいことを、特集を通してみなさんと一緒に学びたいと思います。